かっぱの詫証文

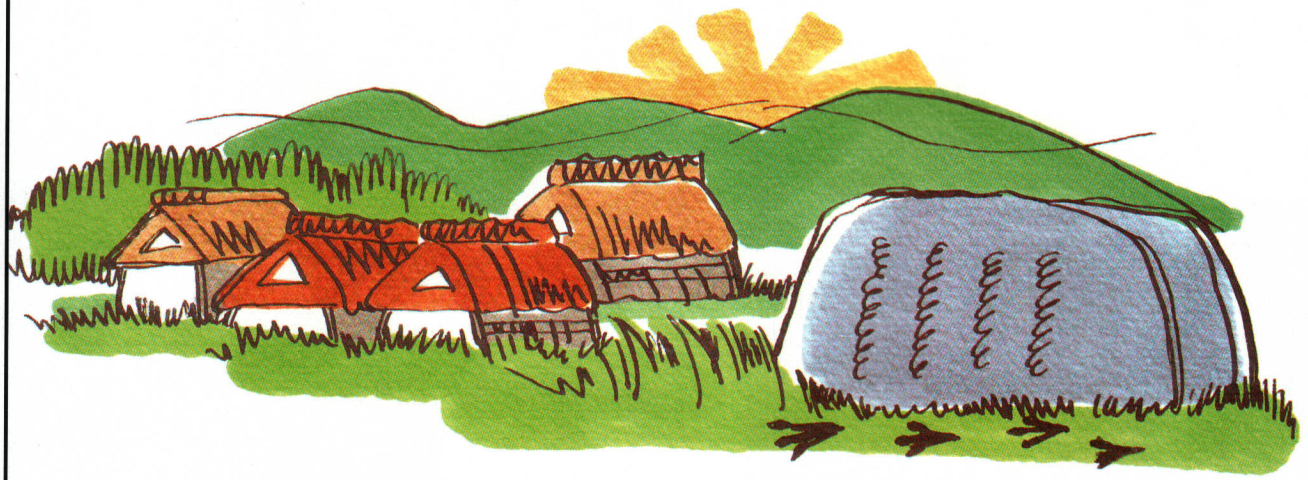
●沖内

民話 1

沖内集落の鎮守赤津神社はその昔、不開（あかず）神社と呼ばれ、その地中深くには城主馬場八郎左エ門がかっぱから預かったわび証文が埋められていると伝えられている。

天正の昔、八郎左エ門は釈迦堂川の濁流を愛馬大月に乗って渡り、女郎寺へやって来た。八郎左エ門はここの住職と碁を楽しみ、帰途につくころにはすっかり日が沈んでいた。帰途についた八郎左エ門が夕闇の中、大月にまたがり釈迦堂川の濁流を進んでいくと、川の中ほどで馬がぴたりと動かなくなった。どんなに叱責しようとも一歩も進まず、さては棒立ちになって騒ぐありさま。さすが剛勇を誇る八郎左エ門も一時は途方にくれたが、鞭をふるってようやく岸にたどりついた。しかし、馬はなおも荒れ狂い、いよいよ不審に思い馬の後部を見れば、怪しげな動物が馬の尻尾につかまっていた。怒った八郎左エ門が逃げる動物を引っ捕まえ「汝かっぱめ！」と大刀を抜いて手討ちにしようとしたところ、かっぱは悲しげな声で「私には妻子や大勢の子分がおり、お手討ちになるならば主を失い明日からは路頭に迷ってしまう」と、再三わびを入れた。涙ながらの謝罪に八郎左エ門も哀れに思い、今後人畜に危害はもちろんのこと、一切水難のないよう守ることを誓わせ、これを偏平石に記しわび証文として差し出させ許してやったという。八郎左エ門はこれを城の東方の小高い丘に埋め、水難除けの祈願をした。

ところが、それから間もなくのこと。ある真夜中に異様な物音が聞こえてきた。村中のニワトリが一斉に鳴き叫び、村は不吉な予感に包まれたが、異様な物音は長くは続かず、また元の静かな夜に戻った。城中では、夜討ちの敵と思い、八郎左エ門自ら出陣の手配に及んだが敵の姿はいっこうに見えず。もしや、かっぱのわび証文に変事があったのではと調べさせたところ、わび証文は無事であったが、土は掘り返されひどいありさまであった。かっぱがわび証文を取り返そうと大群をなし押しかけたが、ニワトリの声に夜明けの時と思い込み、目的を果たさずに引き上げたのだった。八郎左エ門はその後を案じ、わび証文を石棺に納め地中深く埋めなおし、その上に祠を建て、永久に石棺のフタを開くべからずと定め、社名を不開神社とし、水難除けの神として祀ったという。この不開神社がいつの頃から赤津と変わったのかはさだかではないが、現在では社殿は大きく木造に立て替えられている。不開神社を祀って以来、釈迦堂川に水難の被害は見られず、かっぱのわび証文は今なお深く信じられている。

（稿者　石井寅之助）

『天栄村の民話と伝説』から